

論集刊行にあたって

明治期（1868年～1912年）の傑出した思想家にして国際人だった岡倉天心（覚三）（1863年～1913年）は、廃仏毀釈の渦中の古都・奈良での伝統文化・古美術調査を始め、欧米での西洋美術視察の結果、当時の近代化＝西洋化の時代風潮に棹さして、日本美術の復興・推進を決意した。開学（1880年）直後の1882年には専修大学で教鞭をとるとともに、美術学校の創設に奔走した。また、朝鮮半島、中国、インドを訪れ、詩人・タゴール（1861年～1941年）などとの交遊を深めるとともに、『東洋の理想（The Ideals of the East : with Special Reference to the Art of Japan）』（1903年）の冒頭に出てくる「アジアは一つ」‘Asia is one’の着想に至った。少なくとも19世紀後半の時点での日本には、アジア全域からの有形無形の痕跡が明白であり、それは21世紀に至っても、20世紀以降の近代化＝西洋化の影響を凌いでいる。その意味でも、岡倉の洞察は生きている。

本研究プロジェクト「ソーシャル・ウェルビーイング研究センター」（研究代表・原田博夫、2014年度～2018年度）は、先の研究プロジェクト「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）研究センター」（研究代表・原田博夫、2009年度～2013年度）を引き継ぐもので、いずれも文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の助成を受けている。両者に共通するのは、急速な経済発展と市民社会の著しい進展が見られるアジア各国・地域での人々の社会意識の差異と類似性についての基礎的な調査と情報収集を行い、それを整理すると同時に、その知見を最終的には政策の企画・実施に反映させることにある。とりわけ、現下の研究プロジェクトでは、「アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築」を目指している。こうした狙いを実現するために、この論集（日本語版『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』と英語版 The Senshu Social Well-being Review）は、ソーシャル・ウェルビーイング研究のグローバルなプラットフォームたるべく、本研究プロジェクトの研究メンバーのみならず、本研究プロジェクトの趣旨に関心を持つ方々にも広く門戸を開き、幅広い観点から議論を深めたい。意欲を持った方々の論考を積極的に受け入れる所以である。

2015年1月

専修大学 社会知性開発研究センター／
ソーシャル・ウェルビーイング研究センター
代表 原田 博夫
(経済学部教授)